

## 【研究報告】

## 手術室臨地実習担当者の学生への関わり

池田 奈未<sup>\*1</sup>, 百田 武司<sup>\*1</sup>, 植田 喜久子<sup>\*1</sup>, 三村 聖子<sup>\*2</sup>

## 【要 旨】

手術室の臨地実習担当者の実習指導における学生への関わりを明らかにすることを目的とした。手術室の臨地実習担当者6名にフォーカスグループインタビューを実施し、質的帰納的に分析した。手術室の臨地実習担当者の実習指導における学生への関わりとして、【実習指導体制を決定する】、【実習目標を達成するため指導内容を選択する】、【学生の学習効果が高まるように関わる】、【学生の看護実践能力を高めることができるように関わる】、【実習目標をふまえ実習指導計画の課題を明らかにする】、【実習担当者としての自分を振り返る】のカテゴリーを見出した。手術室の臨地実習担当者は、手術室実習の特殊性を捉え、学生の体調管理に気遣い、学生と対話するように取り組み、学習方法として患者擬似体験を取り入れ、学生が実習に積極的に取り組める環境を整えることで、学生が手術室看護を理解することを促していることが示唆された。

【キーワード】 看護学生、手術室実習、臨地実習担当者

## I. はじめに

A看護大学では、生命の危機状態にある対象者がおかれている状況や療養環境を把握し、手術室の看護実践について学習するため、平成19年度より手術室実習を実施している。我々は手術室実習における学生の学びを明らかにするために、A看護大学の看護学生（以下、学生とする）に対して実習レポートからの分析と面接による分析を行った（池田他、2011）。学生は、手術室看護における対象の特性、看護援助の目的や方法について理解し、ヒューマン・ケアリングについて体験に基づき言語化していた。そして、実習のあり方として、教員及び手術室臨地実習指導担当者（以下、実習担当者）は、学生が手術を受ける患者の状態を病態生理学的に治療との関連から理解し、より質の高い周手術期看護を創造できるように関わる必要であると示唆された。

看護基礎教育における手術室実習の必要性については様々な意見があるものの、公立看護系大学で手術室見学実習を80%の大学で行っている（深澤、2006a）。現在も手術室実習を行っている大学が多くあることが考えられ、限られた実習時間の中でも学びの多い手術室実習のあり方について明らかにする必要があると考えた。

先行研究において、看護基礎教育における手術室実習は、主に見学実習で実習担当者に指導を任せられており、手術室側と教育側の連携が必要であることが明らかにされている（深澤、2006b）。A看護大学では、手術室見学実習が行われており、実習担当者が実習指導を行い、実習前の打合せや実習終了時のカンファレンスにより臨地側と大学側の連携を図っている。また、手術室看護師は手術室実習が意義あるものであると考えており、手術室看護師の時間的余裕のなさや学生の事前学習の必要性が課題となっている（深澤、2004、2012）。しかし、手術室勤務の実習担当者に焦点を当て、学生にどのように関わっているか調査したものはなかった。そこで、A看護大学の手術室実習における実習担当者の学生への関わりを明らかにすることで、よりよいケアを見出すための手術室実習への示唆を得られると考えた。

## II. 研究目的

手術室実習における実習担当者の学生への関わりを明らかにする。

\*1 日本赤十字広島看護大学 \*2 広島赤十字・原爆病院

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 研究デザイン

質的帰納的研究。

#### 2. 研究対象者の抽出

調査ときに A 看護大学の手術室実習を実施した施設の看護部長に研究趣旨を記載した依頼状により、実習担当者を推薦してもらった。紹介のあった実習担当者に、文書で研究趣旨と倫理的配慮を説明し同意を得た。

#### 3. 調査場所

A 看護大学演習室で行った。

#### 4. 調査研究期間

インタビュー調査は平成22年11月23日（火曜日）10時～14時に行った。

#### 5. データ収集方法

1) 手術室実習の臨地実習を担当しているという共通の経験を持った実習担当者が、手術室実習における実習指導にどのように取り組んでいるのかを明らかにするため、フォーカスグループインタビューを行った。

2) フォーカスグループインタビューは、内容を録音することに了承を得た。研究者4名がインタビュアー、サブインタビュアー、記録者、観察者の役割を行った。インタビューに際して、インタビューガイドを作成し実施した。インタビューガイドの主な内容は、どのような実習指導を行っているか、実習目標は達成できているか、実習期間は適切かであった。

#### 6. 分析方法

フォーカスグループインタビューの内容を録音し逐語録を作成した。その後逐語録を精読し、実習担当者の学生への関わりについて語った文章を抽出し類似性により分類し、より抽象的なレベルでカテゴリー化し命名した。

なお分析にあたっては複数の研究者で検討し、分析結果の厳密性の確保に努めた。以下、カテゴリー【 】、サブカテゴリー〈 〉で、実習担当者の語りは「 」で示した。

### Ⅳ. 倫理的配慮

実習担当者に対して研究目的、方法、研究参加は自由意思であること、拒否しても不利益を被らないこと、インタビューの録音データは個人が特定されないように個人名及び施設名は匿名とし、調査結果がまとまった時点で破棄すること、などを書面と口頭で説明した。参加への同意は、直接、実習担当者本人から文書で得た。なお、本研究は 日本赤十字

広島看護大学の研究倫理委員会の承認を得た。

### Ⅴ. 結 果

#### 1. 実習担当者の概要

実習担当者は3施設、6名であった。年齢は30～35歳が3名、35～40歳が1名、45～50歳が1名、50歳以上が1名であった。職位はスタッフが4名、係長が2名であった。看護師経験年数は平均17.3（6～30年）、手術室経験年数は平均8.2（4～13年）、病棟を含めた実習担当者経験年数は平均3.8（1～8年）、そのうち手術室の実習担当者経験年数は平均2.5（1～8年）であった。

#### 2. フォーカスグループインタビュー所要時間

フォーカスグループインタビューは、対象者6名全員に対し、途中休憩時間を設け、合計168分間行った。

#### 3. 実習担当者の実習指導における学生への関わりについて（表1）

実習担当者6名のフォーカスグループインタビューを分析した結果、実習担当者の学生への関わりとして、【実習指導体制を決定する】【実習目標を達成するため指導内容を選択する】【学生の学習効果が高まるように関わる】【学生の看護実践能力を高めることができるように関わる】【実習目標をふまえ実習指導計画の課題を明らかにする】【実習担当者としての自分を振り返る】の6つのカテゴリーを見出した。

##### 1) 【実習指導体制を決定する】

【実習指導体制を決定する】とは、実習担当者は手術室看護師スタッフや手術の状況を考慮し学生のニーズに合わせて、学生に誰が何を指導するのかを決定することで、〈人的資源を考慮し指導体制を決定する〉〈行われている手術室の状況を考慮し指導体制を決定する〉〈学生の学習ニーズに沿った実習スケジュールを作成する〉で構成されていた。

〈人的資源を考慮し指導体制を決定する〉

「ただスタッフが少ないので、実際に実習担当者が間接介助をしながら、学生指導をするっていうのが現状なので。」

「スタッフがこのように教えてあげたら学生さんに分かりやすいというのを周知してくれているという状況があります。学生さんに外回り看護師が説明をしながら自分も外回りの介助をするというふうになっています。」

表1 実習担当者の実習指導における学生への関わり

カテゴリー	サブカテゴリー
実習指導体制を決定する	人的資源を考慮し指導体制を決定する
	行われている手術室の状況を考慮し指導体制を決定する
	学生の学習ニーズに沿った実習スケジュールを作成する
実習目標を達成するため指導内容を選択する	手術をめぐり必要となる治療環境を説明する
	手術室看護師の役割の中で重要な役割を説明する
	医療チームにおける多職種協働チームの実際を説明する
学生の学習効果が高まるように関わる	学生のレディネスを把握する
	手術室看護を理解するために有効な方法を選択する
学生の看護実践能力を高めることができるように関わる	学生と対話できるように関わる
	手術室看護の実践を基礎知識と関連付けて理解できるように関わる
	学生の理解状況を明らかにし指導に活かす
	学生が発展的に考えられるように指導する
実習目標をふまえ実習指導計画の課題を明らかにする	実習目標を達成できているか確認する
	学生が見学・体験できない課題を明らかにする
	患者の家族への援助について手術室看護に課題があることを明らかにする
	手術室看護は専門性が高く学生には理解しづらい側面があることを明らかにする
実習担当者としての自分を振り返る	実習担当者自身の成長を感じる
	実習担当者の役割へのとまどいを感じる

〈行われている手術室の状況を考慮し指導体制を決定する〉

「昼から手術が開始の症例をみるというのが現状ですね。」

「学生の見学希望が同じ手術に集まってしまったら、見学する人数も増えてしまう。他の手術にまわってもらったり、入れ替わったりもしている。」

〈学生の学習ニーズに沿った実習スケジュールを作成する〉

「事前に実習内容の希望というものを提出してもらっていますので、それに添えるような症例の所に入ってもらっています。」

2) 【実習目標を達成するため指導内容を選択する】

【実習目標を達成するため指導内容を選択する】とは、実習担当者は、実習目標を達成するために多岐に渡る内容から指導する内容を選択していることで、〈手術をめぐり必要となる治療環境を説明する〉〈手術室看護師の役割の中で重要な役割を説明する〉〈医療チームにおける多職種協働チームの実際を説明する〉で構成されていた。

〈手術をめぐり必要となる治療環境を説明する〉

「患者さんは、初めに手術室入口から扉をくぐって中に入っていきよっていうことを理解してもらおう。」

「手術室の中の構造とか、器械出し看護師がどういふふうな様子で器械を展開しているのかも見学し

ていただいて。」

〈手術室看護師の役割の中で重要な役割を説明する〉

「滅菌物に近付くっていうのはこんなに近づくんじゃないのよ、50センチ以上は絶対空けて。これは患者さんにいいケアを安全に提供したいからって。」

「外回り看護師が実際にどういうふうに患者さんに言葉かけをしたり、どのようなことに気を付けたり、どういうところに注意して体位をとっているのかということを学んでもらっています。」

〈医療チームにおける多職種協働チームの実際を説明する〉

「多職種の中でどのような連携で進められているのかというようなことを学んでもらっています。」

「看護師の役割とか直接介助者の役割だけではなくて、多職種の人たちとリアルタイムにやっているというのはなかなか病棟では見られない。」

### 3) 【学生の学習効果が高まるように関わる】

【学生の学習効果が高まるように関わる】とは、実習担当者が学生の経験や関心を把握し、また学生の理解を促すために方法を選択し関わることで、〈学生のレディネスを把握する〉〈手術室看護を理解するために有効な方法を選択する〉で構成されていた。

〈学生のレディネスを把握する〉

「気分が悪くなって倒れるという人が多いので、手術室のドアを開くときは注意して見て。倒れなかったとか。」

「自分はこういうところに興味を持って来たのかを、絶対に聞いて帰りたい、つかんで帰りたいという言葉を教えてください。」

〈手術室看護を理解するために有効な方法を選択する〉

「学生に実際ベッドの上に横になってもらって、体位は経験してもらおうかなと。わざとモニターを鳴らして。患者さんはどのような心情でここまで歩いて来てベッドに横になるのかということを知ってもらいます。」

「立って見ている手術室の風景と、横になって患者さんと同じような視線で見る手術っていうのはこういうふうに違うんだよ、ベッドっていうのはこういうふうな状況になっているんだよっていうことを体験してもらおう。実際にセッティングされているベッドの上に横になってもらっています。」

「実際に手術を行う看護師あるいは医師の介助をしてもらえるようにガウンのシミュレーションを行った上で、実習担当者と共にガウンテクニックを行うということをしています。」

### 4) 【学生の看護実践能力を高めることができるように関わる】

【学生の看護実践能力を高めることができるように関わる】とは、実習担当者が学生の基礎知識を把握し必要に応じて説明を追加しながら手術室実習を行い、さらに手術室実習後の看護実践に活かせるように関わることで、〈学生と対話できるように関わる〉〈手術室看護の実践を基礎知識と関連付けて理解できるように関わる〉〈学生の理解状況を明らかにし指導に活かす〉〈学生が発展的に考えられるように指導する〉で構成されていた。

〈学生と対話できるように関わる〉

「楽しい雰囲気の話をしたりだとか、全然実習とは違う話をしたりとか。手術の話をするのでも、ちょっと面白おかしくしてからとか、ちょっとでも興味を持ってもらえるようにしています。」

「最初に来た時に挨拶したときに、みんなそれぞれ手術のイメージを持っていると思うので、手術室の看護師さんってどういうイメージ? とか。まあ大体メス渡す人っていうふうに言いますけど。」

〈手術室看護の実践を基礎知識と関連づけて理解できるように関わる〉

「事前課題を元に午前中は課題の補足や説明だったり、質問に答えるという時間を設けています。そのあと手術室全体のオリエンテーションで見てもらって説明を加えていき、午後から手術の実際の見学になります。」

「見学前に学んだ看護師の動きであったり、医師の動きであったり、多職種の連携を1つ1つ説明しながら、あるいは質問を受けながら見学実習を進めていってもらっています。」

〈学生の理解状況を明らかにし指導に活かす〉

「患者さんに関わる時間が短いとか、麻酔がかかるまでのコミュニケーションだけしか手術室の看護師のコミュニケーションでないという捉え方をしている人がすごく多い気がするんです。」

「言葉に出して声をかけるっていうのは学生さんにしたら看護をしているというポイントとしてみやすいと思うんです。私たちが言葉に出して今はこう

「いう考えっていうのを言葉に出して言ってあげなかったら、学生には見づらいだろうなと思う。」  
 〈学生が発展的に考えられるように指導する〉

「手術室で学んだことを次の実習、あるいは病棟での看護にどういうふうに活用できるのかなと投げかけするようにしています。」

「手術室で行われていることを理解してもらうことは継続看護につながると思うので、そういうところに気をつけて指導するようにしています。」

#### 5) 【実習目標をふまえ実習指導計画の課題を明らかにする】

【実習目標をふまえ実習指導計画の課題を明らかにする】とは、実習担当者は実習目標と実際の実習指導を照らし合わせ、行っている実習指導の課題を明らかにしていることで、〈実習目標を達成できているか確認する〉〈学生が見学や体験できない課題を明らかにする〉〈患者の家族への援助について手術室看護に課題があることを明らかにする〉〈手術室看護は専門性が高く学生には理解しづらい側面があることを明らかにする〉で構成されていた。

〈実習目標を達成できているか確認する〉

「人との関わりとか、直接的なケアリングというか、精神的なケアだとか心理的なケアだとかそういうのにすごく目がいきやすい。患者さんが搬入される時の言葉かけ、入室してからどういうふうに過ごされるのか、不安が少しでも軽減されるようにというような答えが多いように思います。」

「患者さんは不安を自分でコントロールしようとしている、その介入のあり方だとか、患者さんの尊厳ってどうだろうっていう話にまでなったんです。」

〈学生が見学や体験できない課題を明らかにする〉

「スケジュールが盛りだくさんすぎて、いつも退室まで見せてあげたいなと思っているんですけど。退室するときに術後つなげられるように。ですけど、なかなか退室までは見られない。」

「患者さんがだんだん麻酔から覚めて、なかなか抜管して退室するまでというのはなかなか見られないのが現状です。」

〈患者の家族への援助について手術室看護に課題があることを明らかにする〉

「どうしても難しいところが家族のところですね。でもここは術前訪問の様子、そこでの家族とのやりとりであったり、質問があれば術中に家族への

情報としてはこのようにしているってことぐらいしか。実際自分たちもできていないですので、難しいところだなあって。」

「手術終了予定時間を超過する場合には進行状況を（家族に）お伝えするんですけども、あとは病棟で待っていることが多いので病棟看護師さんに支えて頂くというような。」

〈手術室看護は専門性が高く学生には理解しづらい側面があることを明らかにする〉

「手術体位をみて、これがどういうことに繋がるのかまで頭の中に入れて、それを理解して文章（実習記録）に表すところまでっていうふうにはいかないのかなと思うところがあるんですけど。」

「何年もかけて手術室看護を勉強している人と、数時間勉強してっていう人と。同じものを考えなさいっていうのもあるんでしょう。なかなかそこに達するまでにすごく時間がかかるなと思う。」

#### 6) 【実習担当者としての自分を振り返る】

【実習担当者としての自分を振り返る】とは、実習担当者は実習指導を通して自分の指導を振り返っていることで、〈実習担当者自身の成長を感じる〉〈実習担当者の役割へのとまどいを感じる〉で構成されていた。

〈実習担当者自身の成長を感じる〉

「学生に説明っていうのは勉強になるんです。ちょっとおかしいよねって思いながら本を開いたりいろいろ調べたり、学会に出て新しい情報を得たらできるだけ新しい情報の提供をしたりということで、自分も勉強になっています。」

〈実習担当者の役割へのとまどいを感じる〉

「（カンファレンスで）私たちが説明しなくても、十分、先生方（大学教員）で指導し得る内容と感じることがあるんですね。」

「オリエンテーションで説明して、さあ実際どうでしょうかって現場を見て頂いた方が良かったのかなって思っ反省したんです。」

## VI. 考 察

### 1. 実習担当者の実習指導における学生への関わりについて

結果より見出した実習担当者の実習指導における学生への関わりについて考察する。実習担当者は、実習指導の方法や手段を工夫し関わっていた。そし

て、その関わりの結果を評価し、課題を明らかにしていた。この過程は実習指導に従事しながら、目標が達成されるかを評価し実習内容を選択し、繰り返し行われている。実習担当者は一日という短い実習期間の中で、学生が手術室看護を学べるように関わりを持っていると考えられる。

まず、実習担当者は不慣れな状況におかれる学生が効果的に学習できるように、学生の体調を気遣っていた。手術室は学生が普段立ち入ることのない特殊な空間であるため、手術室看護師が慣れている手術時の匂いや手術室内の光景は、学生にとって不慣れなものであり、学生にとって気分不良を誘発しやすい。また、学生は日常と異なる空間に入室し、手術着に着替え帽子とマスクを着用し、見知らぬスタッフと対面し、緊張感を高めると考えられる。実習前の学生は手術及び手術室のイメージとして「清潔な」「はりつめた」を挙げており（吉井他、2004）、学生は相当な緊張感を持って入室することが考えられる。実習担当者は学生の緊張感を察して、学生との距離間と近づけようと話題を選んでいた。学生は実習で関わる人たちに受け入れられたいと強く思っている（前川他、2006）。実習担当者が学生の緊張感を和らげようと努め、学生に関心を持ち関わり学生と対話するように取り組むことにより、学生が実習に意欲的に取り組む環境が整えられると考えられる。

二番目に、実習担当者は、A看護大学の実習目標に沿い、学生が実習目標を達成できるように実習担当者が実習プログラムを計画していた。患者の安全を守り手術が円滑に遂行するための看護を提供する手術室看護師の具体的な役割について理解できるような見学内容を選択していた。そして、実習担当者は、実習プログラムを計画する際、学生の学習効果が高まる方法を考えていた。実習担当者は、オリエンテーションと見学の他にも、学生が手術室のベッドに臥床してみるという患者擬似体験を行ったり、手術に必要な技術の中で学生が実践できることを実際に行ってみたりというプログラムを実習に取り入れていた。重症患者模擬体験は、学生の患者に対するイメージが統合される機会となる（田中他、2011）ように、手術室内での患者擬似体験も学生のイメージが具体化されるものであると考えられる。患者の気持ちや心、思いを知ることや、身体的な痛みや快・不快の感覚を理解するためには、体験学習が効果的である（藤岡他、2000）。手術室のベッドに臥床してみる患者擬似体験は、学生が患者の心理的影響や患者に必要なとされる看護を理解するのに有

効である。以上のように、実習担当者は、学生が知識的に理解を深め、さらに体で体験することでも手術室看護の理解を深められるように工夫をしていた。

三番目に、実習担当者は、手術室看護において患者の家族への援助は未成熟であると認識し、学生の実習目標達成が困難であると課題を見出していた。研究当時の手術室実習期間は一日と限られており、実習内容の優先順位を考えると、手術見学が主要な実習内容となり、術前訪問や術後訪問を学生が見学する機会はなく、家族への援助については言語で説明するに留まっているのが現状であった。しかし、実習担当者が手術室看護の課題を学生に示し共によりよいケアを考えることで、病棟看護師と手術室看護師の連携という視点で学べる良い機会となると考える。

## 2. よりよいケアを見出すための手術室実習について

本研究において、実習担当者は、学生は手術室看護について学習を始めたばかりで経験もなく、見学しただけでは手術室看護を理解しづらいと認識していた。手術室看護の専門性の理解には、麻酔や手術侵襲による身体への影響という病態や治療についての理解が不可欠である。しかし、学生の知識はまだ浅いために、専門的な手術室看護の理解に困難を生じる場合があることを実習担当者は認識しておく必要がある。実習担当者は学生の病態や治療についての知識がどの程度持っているのかを判断し、根拠に基づき指導を行うことで、手術室看護の理解が深まると考えられる。

そして、周手術期を過ごす患者は連続した存在であり、継続看護が必要である。実習担当者は、継続看護の視点を持ち、学生が患者を中心に周手術期看護を理解できるよう指導を行う必要性がある。手術室看護を理解する利点は、手術室看護のみならず病棟における術前、術後の看護の質を向上できることである。学生が手術による患者への影響を病態生理学的に理解することで、病棟での患者への看護について裏付けを持って考えることができる。実習担当者は手術室看護の専門的なケアの意味を学生に分かりやすく言語化し伝え、病棟における問題を予測する看護の理解を促す役割を担っている。

## Ⅶ. 結 論

実習担当者の実習指導における学生への関わりを明らかにすることを目的に、実習担当者に対してフォーカスグループインタビューを実施し、以下の

結論を得た。

1. 実習担当者の実習指導における学生への関わりとして、【実習指導体制を決定する】【実習目標を達成するため指導内容を選択する】【学生の学習効果が高まるように関わる】、【学生の看護実践能力を高めることができるように関わる】、【実習目標をふまえ実習指導計画の課題を明らかにする】【実習担当者としての自分を振り返る】の6つのカテゴリーを見出した。

2. 実習担当者は、手術室実習の特殊性を捉え、学生の体調管理に気遣い、学生と対話するように取り組み、学習方法として患者擬似体験を取り入れ、学生が実習に積極的に取り組める環境を整えることで、学生が手術室看護を理解することを促していることが明らかになった。

3. 学生が手術を受ける患者への影響を病態生理学的に治療との関連から理解できるよう、実習担当者は手術室看護の専門的なケアの意味を学生に分かりやすく言語化する必要がある。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、御協力いただきました実習担当者の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

なお、本研究は、平成21～22年度日本赤十字広島看護大学平成21, 22年度共同研究費の助成により行いました。

## 文 献

秋山智, 佐藤一美 (2005). 学生の経験からみた臨床指導者の様相－「情意」という側面からの考察,

看護教育, 46(2), 110-115.

藤岡完治, 野村明美 (2000). わかる授業をつくる看護教育技法3－シミュレーション・体験学習－, 133-144, 医学書院.

深澤佳代子 (2004). 看護基礎教育から見た手術室看護の専門性. 手術医学, 25(1), 83-85.

深澤佳代子 (2006). 看護基礎教育における手術室実習の動向－公立看護系大学の実態調査より－. Ope Nursing, 21(2), 102-108.

深澤佳代子 (2006). 看護基礎教育における手術室看護の位置づけと教授方法について－手術室実習について－. 手術医学, 27(4), 296-298.

深澤佳代子 (2012). 看護基礎教育における手術室看護実習の意義. 手術医学, 33(2), 211-213.

池田奈未, 百田武司, 植田喜久子 (2011). 手術室実習における学生の学び. 日本赤十字広島看護大学紀要, 12, 71-78.

前川利枝, 大石ふみ子, 櫻井しのぶ (2006). 看護学生のはじめての臨床実習に対する思い：フォーカスグループインタビューによる分析. 三重看護学誌, 8, 131-136.

田中由香利, 小澤知子, 濱田麻由美, 原田竜三 (2010). クリティカルケア学内実習における重症患者模擬体験からの学生の学び－イメージマップを用いた分析から－. 東京医療保健大学紀要, 1, 57-64.

吉井美穂, 八塚美樹, 安田智美, 木本久子, 亀谷由美, 田澤賢次 (2004). 周手術期実習における学生の手術に対するイメージの変化. 富山医科薬科大学看護学会誌, 5(2), 103-107.

# Involvement of Operating Room Practicum Instructors with Students

Nami IKEDA<sup>\*1</sup>, Takeshi HYAKUTA<sup>\*1</sup>, Kikuko UEDA<sup>\*1</sup>, Satoko MIMURA<sup>\*2</sup>

## Abstract:

This study aimed to clarify instructor involvement with student in the operating room practicum setting. We conducted focus group interviews with six instructors who supervised operating room practicums and analyzed the results qualitatively and inductively. The following categories were identified as reflecting the current state of operating room practicums supervised by clinical practicum instructors: “deciding on a training system,” “selecting guidance contents to attain practicum goals,” “interacting with students to enhance the effects of learning,” “interacting with students to improve nursing competence,” “clarifying issues related to practicum guidance plans based on practicum goals,” and “reflecting on themselves as practicum instructors.” Our results suggest that operating room practicum instructors capture the uniqueness of operating room practicums, incorporate learning methods based on simulated patient experiences, pay attention to keeping students in good shape, make efforts to interact with students, and encourage students to understand patients by creating an environment that allows students to actively participate in practicums.

## Keywords:

Nursing Students, Operating Room Practicum, Clinical Practicum Instructor

---

\* 1 Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

\* 2 Hiroshima Red Cross Hospital & Atomic-bomb Survivors Hospital